

序 文

教養文化研究所所長 竹中 彌生

今年は長年本学のために尽くされたお二人の先生、吉田邦久先生とポール・マッカーシー先生にお別れを告げなければならない。本号はお二人の先生方の退職記念号である。

吉田先生は駿河台大学開学以来多大な貢献をされた。先ず本学設立にあたり大変な手腕を発揮され、その後は法学部長、現代文化学部長、副学長などの要職を歴任された。また最近では新現代文化学部の設立のために一方ならぬ尽力をされた。その豪腕ともいべき実力を誰もが認める吉田先生が本学の現場を去られるのは大変残念なことではあるが、今後は理事として、引き続き本学のためにご尽力くださるのは心強いことである。

また、ハーバード大学の Ph.D. で、世界的に有名な谷崎潤一郎の研究者でもあるマッカーシー先生が退職なさることも、いたし方の無いこととは言え、本学部にとっての大きな損失である。

お二人の先生は長年本研究所のためにもご協力くださり、本来は所長がお二人への送別の言葉を著わすべきではあるが、お二人を遥か昔からよくご存知のお二人の先生、吉田先生は本間先生に、マッカーシー先生は廣野先生に、退職されるお二人の先生への送別の言葉をお願いした。

吉田先生を送る言葉

本 間 邦 雄

駿河台大学は周知のように1987年に開設されたが、吉田先生は、その2年ほど前の大学設立準備委員会のときから神田駿河台で活動されていた。開学してからは、法学部（のみで発足）の一般教育部会の部会長を務められ、大学の運営、教育、入試関係に主導的な役割をはたしてこられた。

開学前に会合やパーティもあったが、私が最初に吉田先生の存在に気づいたのは、

2月のお茶の水のガーデンパレスの一室であった。その当時、記述解答もあったので各テーブルで科目ごとの手作業の採点がおこなわれていた。私も動員されていたが、そこで、各採点グループの状況を見て回っている40代の先生の姿があった。入試の厳粛な雰囲気と、緊張感を体現しているその姿は、今日でも変わらない。

開学初年度、私はなぜか、吉田先生が委員長を務める入試の実動的委員会に配属された。そこには入試の業務なもちろん、それ以外のあれこれの課題が、当時のI教務課長（最初は教務課が入試業務をおこなっていたはずである）のエネルギーな活動と相乗されて持ち込まれ、毎週のように会議があったとき記憶している。そのころ、会議後によく通った元加治の店で、W大、K大を越える大学を目指しましょうと、吉田先生やI課長と委員会メンバーが話していたことが忘れられない。草創期の大学の情景と言えばそれまでだが、その心意気については先生方にも共感していただけるだろう。

その後、経済学部設立にともない、「一般教育協議会」発足にも尽力され、その委員長に就任して、総合教育、教養教育の推進に力を注がれた。この協議会を母体にして「第三学部」を設立しようという気運も盛り上がって計画も進んだが、内外の事情もあって新学部計画はいったん挫折した。しかし学部縦割りではなく、総合教育、教養教育が大学教育の枢要であり、それが大学活性化の原動力になるという志向は、今日こそますます重要ではないだろうか。吉田先生を中心に推進され、1997年に第四学部として発足した現代文化学部と、教養教育の理念を体現する研究所として設立された教養文化研究所にもつながるものである。

エピソードをひとつ。地下鉄サリン・テロ事件が発生する前に、地下鉄の駅に置かれたアタッシュケースから霧が噴き出すという事件があった。オウム真理教がボツリヌス菌の噴霧を実行したものだ。テレビなどで報道されたが、何かのいたずらかとも思われ、評論家はだれも的確な指摘をしていなかった。そのことが大学で話題になったとき、吉田先生はそのような細菌類の撒布をはかったテロ行為未遂だろうとあっさり語っていたのである。話半分で聞いていたが、あとでその通りであることが明らかになった。忘れてはいけない、吉田先生は生物学者、科学者なのである。

マッカーシー先生を送る言葉

廣野行雄

「私は、ポール・マッカーシーと申します。名前はポール、姓はマッカーシーですが、歌は唱いませんし占領も赤狩りもしません。」

わたくしが本学の専任教員となって最初の懇親会でのマッカーシー先生の挨拶はこのように始まった。欧米では、まったくジョークを交えないスピーチは響きをかろうと聞いてはいたが、それは単にウイットに富んでいるというだけでなく、先生の人柄や政治的なスタンスをも表していて、周到な自己紹介になっていたのである。それ以来、はじめの数年間所属学部は別であったが同じ一般教育協議会のメンバーとして、現代文化学部ができてからは同じ学部の同僚として二十年の月日を送ってきた。

マッカーシー先生の学問的業績は、日本近現代文学の研究、翻訳、紹介にある。研究対象は、谷崎潤一郎そして近年では中島敦ということになるかと思う。先生の関心が中島敦にあることを知ったとき、谷崎の研究家がなぜ中島なのかと訝しんだ。彼らの文学、特にその文体は、まさに対極にあるものではないか。しかし、その後、永井荷風に対する関心の有無をお尋ねしたとき、たまたま指導教授が谷崎の研究者であったので自分も谷崎の研究に携わってきたが、実は荷風は谷崎以上に好きな作家である、という先生の答えを聞いて上の疑問は氷解した。『雨瀟瀟』や『花火』のような筆記小説に底流する批判精神とその文体こそ、禾原と号して漢詩人でもあったその父からの血を、韜晦の衣装をまとわぬ荷風を感じさせ、そこに中島との類縁性が明らかに見いだされるからである。中島への評価の高さの表現も、同年に生まれた中島、太宰治、松本清張をならべて「その順に松、竹、梅ですね」という、いかにも先生らしいものであった。先生の日本語の文章に対する趣味の良さと文学的鑑識眼の高さを再認識させられた思いがした。

先生が努めて日本人の嗜好習性を理解し、その文化習慣を尊重しようとしてこられたことは疑えない事実である。親交のあった三島由紀夫について、その文学とひととなりを愛しつつも、その政治思想はついに自分とは相容れないものだったとおっしゃる先生であるが、明治日本に対する思い入れはひととおりではなく、ときに

は日本人であるこちらの方が少しく鼻眞が過ぎるのではないかと面はゆい思いをすることすらあった。現在進めておられる『坂の上の雲』の英訳も明治日本に対する「偏愛」の表れかと思う。

先生が大学という「場」に一貫して高いものを求め、したがって大学人であることに強い矜持を持してこられたこともまた先生を知る者が等しく認めるところである。だから、時に本学が先生に求めるものとの間に落差を感じられ、不遇感を抱かれ、一方、それが学内当路の人々には、一種の権高さや平等の原則を軽んじるものと受けとられるという不幸な事態も存在したように見受けられた。いくつになっても稚気が抜けず、世事に疎いわたくしにはその点先生がお気の毒に思われた。

われわれは、しばしば送別の場にあつて、余人をもって代え難いという言葉に耳にし、また口にする。多くの場合が社交辞令であり、時には揶揄の語気を感じることもさへある。しかし、いま先生が本学を去られようとするにあたって、先生の存在を言い表すに、これ以上適切な言葉を不敏にして知らない。先生の他の誰が、大は本学の名を海外にまで伝え、同僚であることに誇りを感じさせ、小は本学及び我々日本人同僚が必要とする英文表現に確かな裏付けを与えてくれよう。わたくし個人についていえば、先生によって学術、識見というものが国籍や人種をこえて、人と人を敬意によって結びつけるということ、理念や願望としてではなく実感とともに経験させていただいた。記して感謝の意を表したい。

しかるべき立場にないわたくしのようなものが、このような文を草したことを班門に斧を弄ぶふるまいとして不快の念をもたれる方がおありになったとすれば、どうかマッカーシー先生への惜別の思いの篤さに免じてご寛恕いただきたいと思う。